

Fusion of Great Heathenism: The Celts and Mexico in *The Plumed Serpent*

Mayumi Kawana

Kate Leslie, a heroine in *The Plumed Serpent*, was an Irish woman of Celtic descent, who would be forty soon. D. H. Lawrence felt nostalgia for Celticism and he treated it as a subject of his own literature.

Kate came to Mexico, thinking that she would have to be born again. And she felt that her inevitable fate lay concealed in Mexico. Later she met the leaders of a movement of Quetzalcoatl: Ramon and Cipriano. Quetzalcoatl is a rare bird with green wings. In Mayan Mythology, it is said that a goddess had swallowed emerald and consequently it was born. Christianity saddled a person with a heavy burden and set up the hell. But the humanity Lawrence yearned for was in the pre-Christian ancient heathen world.

Kate wore the bridal dress of green with an emerald ring. Quetzalcoatl was a rare bird with green wings. The term of endearment for Ireland is 'The Emerald Isle.' In Lawrence, green was a color having magnificent nobility. He regarded King Arthur and Quetzalcoatl as the hero. So Lawrence fused the Celts and Mexico in *The Plumed Serpent*. Eventually 'Mexico is another Ireland.'

偉大なる異教の融合— 『翼ある蛇』におけるケルトとメキシコ

川名真弓

I

この小説の主人公ケイト・レズリーは、もうすぐ40才になろうとするケルトの血を引くアイルランド女性である。最初の夫タイラーとの間に一男一女をもうけたが離婚し、アイルランド独立運動の闘士であった二番めの夫ジョアキムは、凶弾に倒れた。彼女は夫の死はキリスト教的犠牲の一つだと考えていた。彼女はアイルランドの誇り高い旧家の生まれで「世襲貴族は本質的に優越しているというイギリス的ゲルマン的な観念で」¹ 育てられた。また彼女は「精神の美ではない。暗く強靱で、決して壊れぬ血の美しさ、魂の開花の美しさ」² を宿していた。加えて次のようなケルト的特性を備えていた。

Kate was more Irish than anything, and the almost deathly mysticism of the aboriginal Celtic and Iberian peoples lay at the bottom of her soul. It was a residue of memory, something that lives on from the pre-Flood world, and cannot be killed. Something older, and more everlastingly potent, than our would-be fair-and-square world.³

ケルト族はローマ帝国が成立する遙か前、今から約3000年ほど前にヨーロッパを席卷していたが部族単位の活動に固執し、ローマ帝国のような国家を形成しなかった。彼らは文字を持たず詩人の口を通して、民族の成り立ち、神話、伝説を後世に伝えていった。文字による記録がないために、ヨーロッパ文明はギリシャ、ローマを発祥地として定義され、ケルト族は影のヨーロッパとして綿々として生き続けてきた。テュアサ・デ・ダナーン（女神ダーニヤの一族）と考えられていたケルト族は、勇敢で死を恐れず、死後の世界を信じ、そこで妖精たちと暮らすことができると信じていた。そこは死と魔術に結びついたシイと呼ばれる「異界」であった。イギリスのコーンウォール地方やアイルランドでは現在でもケルト文化の残照が見られる。そのアイルラン

ドについて、D.H.ロレンスは次のように述べている。

Ireland would not and could not forget that other old, dark, sumptuous living. The Tuatha De Danaan might be under the western sea. But they are under the living blood too, never quite to be silenced. Now they have to come forth again, to a new connection. And the scientific, fair-and-square Europe has to mate once more with the old giants.⁴

さて現代に生きる私たちは、時間について過去、現在、未来という直線的思考を持っている。これは聖書の理念や近代の形而上学の教え、つまりある真理を遙か前方に設定してそれに向かつて直線的な時間が進行しているという思考である。一方、古代の人々は時間は循環するという循環再生思想を持っていた。メキシコのインディアンの中でも、未来と過去は極端に混同され、過去は永遠に去ったものではなく、なおどこかに現存するものであった。マヤ文明では太陽の運行に基づく365日暦と、260日の宗教暦を組み合わせて、52年周期の暦体系を持っていた。ケルト族も1897年に発見された「コリニーの暦」に見られるように、時間に関する循環再生思想を持っていたが、それがより顕著になるのはケルト美術においてである。ケルト美術の最大の特徴は渦巻き模様である。これは螺旋構造をなして、うねり、反転などを加えることによって、めくるめく変容性を示す。古代ケルト族の神官であり予言者でもあるドルイドは、「靈魂不滅」の観念を持っていたと考えられており、ケルト美術の初めと終わりのない渦巻き模様は、その靈魂の無限の再生を表象しているとも言える。死とは「異界」での生の通過点に過ぎない。渦巻き模様、組紐模様、動物組紐模様などは、ケルト族のもつ時間的空間的限界を越えた豊かな創造力の所産と言える。ロレンスはこの古代異教の循環再生思想に郷愁を感じ、次のように述べている。

循環によって運動すると考えられていた異教徒たちの時間概念にはもっと自由闊達なものがある。それは捕らわれぬ上下運動を可能にし、いついかなるときにも精神状態の完全転換を許容する。一つの円環が完成されるや、吾々はまた別のレヴェルに降下しあるいはと上昇して、脱然新しい世界の住人となる。しかるに時間持続の方法に躊躇しているかぎり、吾々は一步一步別の峰に倦み疲れて杖を引かねばならぬのだ。⁵

ロレンスにおいて思考とはこのような渦巻きの深淵の奥深くへ測鉛を垂れることであった。ロレンスが憧憬する古代異教の世界は自由でのびやかで、「本能へ帰れ」と叫び続けた彼の希求の世界である。その異教世界の一つであるケルトを、ロレンスはどのように感じていたのであろうか。1915年コーンウォールに滞在していたときの彼の書簡の中にそれを見いだすことができる。

I love being here: such a calm, old, slightly deserted house—a farm-house; and the country remote and desolate and uncounted: it belongs still to the days before Christianity, the days of Druids, or of desolate Celtic magic and conjuring; and the sea is so grey and shaggy, and the wind so restless, as if it had never found a home since

the days of Iseult. Here I think my life begins again—one is free.⁶

ロレンスはこのようなケルトに郷愁を感じて自分の文学の素材として扱い、ケイトの中にそれを具象化しつつこの小説は進んでいく。ケイトは40歳の誕生日を迎えて「生まれ変わらなければならない」⁷そして「神秘が与えられて、再び世界が私にとって生き生きとしたものになってほしい」⁸と考え始め、次の目的のためにメキシコへやってきた。

... , lingering dawn of maturity, the flower of her soul was opening. Above all things, she must preserve herself from worldly contacts. Only she wanted the silence of other unfolded souls around her, like a perfume.⁹

この静謐な世界を希求する旅は、ケルト族が負っている運命としてのエグザイルに他ならない。ケルト族は大陸からブリテン島へ、ブリテン島からアイルランドへやってきた。聖人ブレンダンは「約束の地」を求めて出航し、ジョイスはヨーロッパ大陸を放浪し、ラフカディオ・ハーンは西の果て日本までやって来た。このエグザイルがユダヤ民族の負っているディアスポラ（離散）と異なる点は、運命とはいえ自己上昇を図るという積極性にある。「生まれ変わらなければならない」¹⁰「神秘が与えられて再び世界が私にとって生き生きとしたものななつてほしい」¹¹という積極性を携えて、メキシコという「異界」へ到着した。大西洋はその「異界」への入口であった。

メキシコは「洪水以前の世界」¹²に属していて、ケイトにとって暗く不気味で陰鬱な国であった。また絶望と不屈という不思議な感じを与える国でもあった。ロレンスはこのメキシコでケイトの身に起こるであろうことを予言している。

It was the end of something, and the beginning of something, far, far inside her: in her soul and womb.¹³

ケイトは自分自身の奥深い部分で何かが芽吹き始め、「ほとんど自分自身を持ち上げることでできない巨大な一巻きの蛇のように、重く耐えがたい運命が潜んでいることを」¹⁴感じ始めていた。復活祭の次の日曜日、ケイトはメキシコ市で最終日の闘牛を見に行っていたが、あまりの残酷さに耐えきれず席を立った。外では熱帯の雨が土砂降り、雨宿りをしている際にシプリアーノに出会った。初めて出会った時ケイトは‘Irish’¹⁵とはっきりと答えた。後に彼を通じてドン・ラモンに出会った。

II

ロレンスが実際に滞在していた1920年代のメキシコは、1910年末から始まったメキシコ革命の大波が独裁者ディアスの国外逃亡の後、革命と反革命の間で揺れ動き、激動期の余波が残っていた。この小説『翼ある蛇』はその激動するメキシコ社会を舞台としている。大統領モンテスに

よる革命体制は、おろしたての箒のように溜まったごみがある程度掃きだしはするが、かえって反革命を誘発して混乱を増すばかりであった。この精神的にも経済的にも貧しいメキシコの状況を、政治的よりは宗教的に救済してメキシコに真の生命を蘇らせようとする運動が始まった。これがメキシコの古い神ケツアルコアトルを導きの星とする運動であり、ラモンはその運動の指導者であり、シプリアーノは小柄なレッドインディアンの血を引く将軍で、ラモンの忠実な部下であった。この二人はラモンがロレンスの魂を、シプリアーノが肉体を顕現している。

ケツアルコアトルはケツアルとコアトルからできた合成語である。ケツアルはチアパスとグアテマラの高原地帯に生息する緑の羽を持った珍しい鳥で、木の梢に住み、ほとんど人目に触れない鳥である。この鳥は人間を時間の絆から解き放すことができると考えられていた。コアトルは蛇を意味し、マヤの神話の中で時間に関係する動物である。ケツアルコアトルに関する神話は次のようなものである。彼は蛇の下着の女神といわれたコアトリクエがエメラルドを飲み込んだ時に、妊娠生まれたとされている。「英雄は処女から生まれる」という英雄誕生の共通項として彼女は処女であった。彼は天敵テスカトリポカの奸計に陥れられて、酔っぱらいの乱痴気騒ぎにはめられ、そこで妹ケツアルペトラトルと性的交渉を持ってしまった。それを悔いた彼は羽の衣装を着てトルコ石の仮面を着け薪を積み上げて、身を投じ燃えつくした。遺灰は鳥の群れとなり、金星となるべき心臓を持って昇天した。明けの明星は鳥たちが高く飛ぶのを見ると、地平線の下での死者の国まで沈み4日間そこに留まり、その間ケツアルコアトルは天国で使う矢を集めていると言われている。8日後に彼は再び大きな星となって現れ、それ以後はいつも玉座に治まっているとされている。この神話において彼は東から来て、東へ帰っていくと信じられている。この神話を具現化する人物がいた。10世紀後半に生まれたトルテカ族最後の王トピルツィンである。彼は啓蒙家兼法律制定者であり、技術工芸の発案者であった。農耕や暦を発明したとも言われている。彼は自らをケツアルコアトルと唱え、暗殺された父の仇を討ち王座に就いた。亡くなる時、彼は「一の葦の時代に戻る」と約束した。彼は英雄であった。英雄は本来人間であるが、その偉業と光輝さは時間の経過と共に、昇華されより高次の神話が形成されていく。ケツアルコアトルの心臓が昇天して金星になったという伝説から、彼のシンボルはホラガイである。ホラガイの横断面は半分星のように見える。そしてその表面には渦巻き模様があり、巻き始めてから外に渦を巻いていく全過程は、一つの時代の終わりともう一つの時代の始まりを、つまり永遠を表している。この渦巻き模様は、ケルト美術のそれと同様に時間の循環再生を表明している。ここにもケルトとメキシコの共通点が見いだせる。

ここでラモンとシプリアーノの展開するケツアルコアトル運動を考察することとする。このケツアルコアトル運動には二つの側面がある。一つはロレンス自身における反キリスト教精神の現れであり、もう一つは古代メキシコの神であり英雄であるケツアルコアトルの復活である。この二つの側面は互いに別の基底を持ちながらも融合して一つの流れとなり、ケツアルコアトル運動へと結実していく。ラモンはメキシコの現状を考え、次のようにシプリアーノに語りかける。

Mexico is like an old, old egg that the bird of Time laid long ago; and she has been sitting on it for centuries, till it looks foul in the nest of the world. But still, Cipriano, it is a good egg. It is not addled. Only the spark of fire has never into the middle of it, to start it. . . . And the old Dove of Europe will never hatch the egg of dark-shinned America. . . . But here, Cipriano, here, let us hatch the chick before we start cleaning up the nest.¹⁶

時の鳥が置き去りにした古い卵のようなメキシコには魂がないとラモンは考えている。ケツアルは人間を時間の絆から解き放すと考えられていた鳥であり、コアトルも時間に関係する蛇であった。そのケツアルとコアトルが融合されたケツアルコアトルこそ、メキシコの未来の希望というひなどりをかえすことができると考えたラモンは、自らを 'The Men of Quetzalcoatl'¹⁷ と称して、不気味な太鼓の音に合わせて歌を歌う。各々の夢は、花の中心とちらちら光ながらも目覚めぬ蛇の中で始まり成就する。地を這う蛇が翼を授けられて鳥になる時、昼と夜の間輝く明けの明星つまり金星という神のごとき存在となる。そして平和と争いの深遠の場所で、それは無限の飛行を続ける輝かしい存在となる。ロレンスの魂の顕現者であるラモンは、'Men of the Morning and the Evening Star'¹⁸ と自負しているのである。

ロレンスのキリスト教観は次のようなものであった。

黙示文学は魂の救済に関してはいささかも語ることをせず、ひたすら「世界の運命」をさしめし、淫楽に耽るものに呪詛の言葉を浴びせかけ、その懲罰と復讐とを、狂熱的に絶叫する。……古代異教観念の壮大な宇宙的形象に仮託して、ひそかに自分たちの現世的不遇の鬱憤ばらしをおこなひはじめたのである。¹⁹

ロレンスの見地からすれば、キリスト教は人間の意識の根底にある本能を否定し、一つの真理に向かっていくために、人間を仮死状態にしてしまっている。ではロレンスが憧憬する異教世界の一つのケルトはどうであろうか。

ケルトの伝統には永遠の功罰という観念はない。そもそも善良なるキリスト教徒は、どのようにして無限の神の慈悲という教義とこれほど相反する観念を彼らの教義に加えることができたのだろう。みずからの意思で不完全な存在を創り出しながら、その一方で、その不完全さ故に、一部の者を永遠に終わることのない苦痛によって罰するというのは、もはや正義ではないだろう。……愛の神である創造主に永劫の地獄を設置することなどできなかったはずだ。ドルイド僧の教えは、その意味ではるかに神の愛の観念にふさわしいことになるだろう。²⁰

キリスト教は人間に原罪という重荷を負わせ、地獄という世界を設けた。ロレンスの希求してやまない人間性は、キリスト教以前の古代異教世界にある。この精神はケツアルコアトル賛歌に

如実に反映されている。それは「世界に向かって、外に向かって歌われるのでも、キリスト教のごとく神に向かって上方に歌われるものでもない。抑えられた忘我の烈しきで、内部の神秘、人の存在の他の次元のなかに歌いこまれる」²¹ のである。そしてこの賛歌を聞いた人は、「我々の回転する空間軸の内部にある無限の広がりの中にいることに気づき、……樹々でさえも行き、また環る広大さ。魂が自ら夢みて休らい、満ち足りて高貴な」²² 場所にいることを了解することができるのである。

III

「万象の中心にある微妙な、調和的な沈黙のなかに、自分の魂の開きつつある花だけと共にいるために」²³ メキシコへエグザイルしてきたケイトにとって、メキシコは暗く重々しいものであったが、ケツアルコアトル運動とその指導者たちに出会って、反発する心と魅了される心が共存するようになった。この頃、ロレンスの魂の顕現者であるラモンは、彼の肉体を表すシプリアーノにケイトとの結婚を進めた。英雄が英雄であるためには、女神と交わらなければならない。「神授の王権と、王と女神の神聖な結婚は、おおむね世界共通であり、後者はインドや近東でじゅうぶん確証されているのである。」²⁴ のである。ケルト神話の中でも、ダグザは女神モリガンや河の女神ボアーンと同衾した。これは原初の形をとる本質的な二人の神が行う儀礼的結婚を意味する。アーサー王が娶ったグウィネヴィアは、ケルト神話・伝承の女神や女王達——モリガン、メイブ、ブーディカ、カーティスマンデュア——などのイメージを内在している。同様にケツアルコアトルがケツアルコアトルであるためには、古代メキシコの神の一人であるウィチロポチトリの愛人を意味するマリンチェと交わらなければならない。

悪魔のような恋人シプリアーノの申し出にケイトは躊躇するが、結局受入れることにしケツアルコアトルによる結婚をした。雨中で出会った二人は雨の中で一つになった。ここにも循環再生思想を読み取ることができる。ケイトが初めてメキシコへやって来た時に感じた予感つまり「巨大な一巻きの蛇のように、重く耐えがたい運命」²⁵ とは、シプリアーノとの結婚であった。シプリアーノは「マレー人のように黒い肌、ギリシアの古銭に彫られた豊かな肉体、厚い胸、張り切った男性の尻」²⁶ をしている。ケイトはシプリアーノの姿に、いにしえの世界に属するレッドインディアンの生命力を読み取っていた。一方シプリアーノにとって、白い手をしたケイトは高貴なマリアのごとき女神そのものであった。

He looked at her soft, wet white hands over her face, and at the one big emerald on her finger, in a sort of wonder. The wonder, the mystery, the magic that used to flood over him as a boy and a youth, when he kneeled before the babylish ffigure of the Santa Maria de la Soledad, flooded him again. He was in the presence of the goddess, white-handed, mysterious, gleaming with a moon-like power and the intense potency

of grief.²⁷

女神マリンチェとなったケイトの花嫁衣装は緑色であった。それは 'Yet my hand hastouched the hand of Quetzalcoatl, and among the black leaves one sprung green with the colour of Malintzi.'²⁸ 'Green Huitzilopochtli is Malintzi's blade of grass.'²⁹ 'Malintzi of green dress will open the door.'³⁰ 'When the water of Malitzi falls making a greenness.'³¹ 'Light the green candles of Malintzi like a tree in new leaf.'³² などのケイトのシンボルカラーが緑色であることから、当然のことであった。ロレンスにおいて緑色は、「あらゆる新しい光、萬物に生命を鼓舞する光の精ともいふべき碧緑の曙光に見るあの緑色」³³ であり、「萬物創造の曙は、造物主の姿から発する透きとほるような緑光のうちに展開された」³⁴ のであり、「寶石のように壮麗な緑の高貴」³⁵ さを持っている色であった。つまり偉大なる生命力を与える色であった。そしてケツァルは緑の羽を持った鳥であった。ケツァルコアトルは母親がエメラルドを飲み込んだ時に妊娠したと言われている。ケイトはエメラルドの指輪をしていた。さらにアイルランドの愛称は 'the Emerald Isle' つまり「緑したたるエメラルドの島」である。ここでマリンチェとなったケイトの内部にあるケルト族の魂と、シプリアーノに象徴される大洪水以前の世界に属するメキシコの魂が融合された。ここにロレンスの意図する異教の融合を読み取ることができる。アイルランドで一度は死んだも同然のケイトにとって、エグザイルとしてやって来た「異界」の地メキシコは、偉大なる異教の融合の地であった。

IV

以前ケイトはプラザで、蛇の上に鷲が立っている印刷物つまりケツァルコアトル運動のパンフレットを手にしたことがあった。その中に次のような賛歌があった。

In the place of the west
In peace, beyond the lashing of the sun's bright tail,
In the stillness where waters are born
Slept I, Quetzalcoatl.

In the cave which is called Dark Eve,
Behind the sun, looking through him as a window
Is the place. There the waters rise,
There ther winds are born.

On the waters of the after-life
I rose again, to see a star falling, and feel a breath on my face.
The breath said: Go and lo!

I am coming.

The star that was falling was fading;

Was dying.³⁶

ケツアルコアトル神話では、ケツアルコアトルは東の空へ飛んでいった。しかし東方は西方へと置き換えられ、ケツアルコアトルはキリストの再臨のごとく壮大に歌いあげられている。古代異教世界に郷愁を感じていたロレンスの立場と、これまで辿ってきたケルトとメキシコの融合の視点から考慮して、この西方はケルトの極楽浄土アヴァロンを意味するように思われる。「一の葦の時代に戻る」と約束したトルテカ王としてのケツアルコアトル。「私はいつか戻る」と約束したアーサー王。ロレンスがケツアルコアトルとアーサー王を意識的に融合しているのが読み取るように思われる。

アーサー王はウーサー公とイグレーヌの間にできた子であり、魔術師マーリンの予言通りブリタニアの誉れとなった。アーサー王の時代には、円卓の騎士たちの冒険や宮廷風恋愛が花開くなど、繁栄の時代を迎えた。しかし妃グウィネヴィアと騎士ランスロットの不義を知り、その際にモルドレッドの起こした反乱で深手を負い、アーサーはソールズベリーの戦場を去った。アーサーは「いつか戻る」と最後の騎士に約束して、船に乗り西方へ消え去った。アーサー王は今でもアヴァロンの地で生きてると信じられている。またほら穴で眠っているという伝説もある。アーサーのものであろうと言われている墓には、「過去の王にして未来の王」というラテン語の墓碑銘が刻まれている。つまりアーサーはアヴァロンの地で傷を癒し、彼の民ケルトの人たちにとって必要とされる時が来たならば再来して民を率いると信じられている。これがアーサー王伝説である。ケツアルコアトル伝説と同様に、アーサーにも原型たる人物がいたと考えられている。アヴァロンの島あるいはグラストンベリーの丘の麓で眠りにについているアーサー王は、ロレンスにおいては、‘old reality like King Arthur’³⁷ であり、「過去の王にして未来の王」の状態再来の時を待っているのである。

豊かな古代文明。侵入者による略奪・征服とそれに伴う悲惨な歴史。民族独自の国家を願う思想。そのために生じる英雄の必要性。ケルトとメキシコは、どちらも民族存亡の危急の際に再来する英雄を必要としていた。ロレンスはその英雄を、‘The strange, old, uncounted, unregistered, unreckoning days of ancient heathen world’³⁸ という古代異教世界に求めた。それがケルトではアーサー王であり、メキシコではケツアルコアトルであった。ロレンスはケルトとメキシコを、アーサー王とケツアルコアトルという二つの ‘old reality’ すなわち「古代の真実」を、小説『翼ある蛇』の中で融合させたのである。つまり、ロレンスにおいては、‘Mexico is another Ireland’³⁹ — 「メキシコはもう一つのアイルランド」であった。

注

- 1 Lawrence D.H. *The Plumed Serpent*, Cambridge: Cambridge UP, 1987. P.416.
- 2 Ibid., p.107.
- 3 Ibid., p.415.
- 4 op. cit.
- 5 ロレンス『現代人は愛しうるか—アポカリプス論—』福田恒存訳, 筑摩書房, 昭和49年。p.95.
- 6 *The Letters of D.H. Lawrence: vol II (June 1913–October 1916)* ed. George Zytaruk and James T.Boulton. Cambridge: Cambridge UP, P.493.
- 7 *The Plumed Serpent*: p.59.
- 8 Ibid., p.105.
- 9 Ibid., p.59.
- 10 op. cit.
- 11 Ibid., p.105.
- 12 Ibid., p.415.
- 13 Ibid., p.414.
- 14 Ibid., p.24.
- 15 Ibid., p.22.
- 16 Ibid., p.191.
- 17 Ibid., p.338.
- 18 Ibid., p.178.
- 19 ロレンス p.5.
- 20 ヤン・ブレキリアン『ケルト神話の世界』田中仁彦訳, 中央公論社, 1998, p.57.
- 21 *The Plumes Serpent*: p.126.
- 22 op. cit.
- 23 Ibid., pp.344–5.
- 24 プロインシアス・マッカーナ, 『ケルト神話』松田幸雄訳, 青土社, 1992, p.243.
- 25 *The Plumed Serpent*: p.24.
- 26 Ibid., p.423.
- 27 Ibid., p.71.
- 28 Ibid., p.379.
- 29 Ibid., p.384.
- 30 Ibid., p.379.
- 31 Ibid., p.385.
- 32 op. cit.
- 33 ロレンス, p.145.
- 34 op. cit.
- 35 op. cit.
- 36 *The Plumed Serpent*: p.119.
- 37 *The Letters of D.H. Lawrence*: p.492.
- 38 *The Plumed Serpent*: p.288.
- 39 Ibid., p.73.

参考文献

- アッシュ、ジェフリー、『アーサー王伝説』横山茂雄訳、平凡社、1992。
- Bernal, Ignacio. *Ancient Mexico In Colour*: London: Thames and Hudson, 1968.
- . *The Mexican Museum of Antholopology*: London: Thames and Hudson, 1973.
- Chadwick, Nora. *The Celts*: Middlesex: Penguin Books, 1985.
- Eliot, T.S. *After Strange Gods*: London: Faber and Faber, 1933.
- Ellis, Peter Berresford. *The Celtic Empire: The first Millennium of Celtic History 1000BC: 51AD*: London: Constsable, 1990.
- Hough, Graham. *The Dark Sun: A Study of D.H. Lawrence*: New York: Straus and Giroux, 1973.
- Lawrence, D.H. *Apocalypse and the writings on Revelation*: Cambridge: Cambridge UP, 1980.
- .『愛と性の倫理』羽矢謙一訳、南雲堂、1976。
- .『無意識の幻想』小川和夫訳、南雲堂、1978。
- ニコルソン、アイリーン。『マヤ・アステカの神話』松田幸雄訳、青土社、1997。
- Pigott, Stuart. *The Druids*: London: Thames and Hudson, 1993.
- 佐々木学。『D. H. ロレンスの文学と思想』松柏社、昭和51年。
- Schneider, Daniel J. *D.H. Lawrence The Artist As Psychologist*: Kansan: UP of Kansas, 1984.
- Simpson, Hilary, *D.H. Lawrence and Feminism*: London: Croom Helm, 1982.
- 柴田多賀治、『ロレンス文学の世界』八潮出版、1988。
- スピルカ、マークス、『愛の倫理 D. H. ロレンス研究』山口圭三郎訳、篠崎書林、昭和53年。
- 鶴岡真弓、『ジョイスとケルト世界』平凡社、1997。